

漁業実態調査（刺網、ます網）

（中海有用水産動物モニタリング事業）

松本洋典

1. 研究の目的

中海の代表的な漁業で、ほぼすべての魚種の周年的な出現動向を把握しやすいます網と、成魚を積極的に漁獲している刺網の魚種や漁獲量を詳細に把握し、中海の有用魚介類の有効活用を図るための基礎資料を収集する。

2. 調査方法

①標本船野帳調査

漁業実態および有用魚介類の動態を把握するために、刺網1地区（江島）、ます網2地区（東出雲、本庄）で、漁業者各1名に操業日誌の記帳を依頼した。

②漁獲物買取り調査

ます網2地区（本庄、東出雲）において、月1回の頻度で全漁獲物の買取りを行い、出現魚種や体長組成等を調査した。

3. 調査結果

①標本船調査

刺網の年間漁獲量は平年（過去5年平均、以下同様）よりも約0.4トン少ない8.3トンで、平年の95.1%であった（添付資料-表1）。魚種組成は、ボラとスズキの2魚種が漁獲の大半を占める（9割）状況は平年と同様であるが、平成29年度はキチヌの比率が増加したことが特徴的であった。

ます網の年間漁獲量は本庄で2.7トン、東出雲1.1トンで、本庄は平年よりも0.6トン多く、東出雲は逆に平年よりも0.6トン少なかった（添付資料-表2、3）。主要魚種の組成を平年と比較すると、本庄、東出雲とも近年増加傾向にあったヒイラギがやや減少した。

②ます網漁獲物買取り調査

買取り調査を開始した平成20年以降今年度までに本庄水域で確認された魚介類は、魚類が14目44科の87種、軟体類が3目3科の5種、甲殻類が1目8科の16種で、合計18目55

科108種であった（添付資料-表4）。本庄の平成29年度の出現種の組成を尾数割合（添付資料-表5）で見ると、ゴンズイ、ヒイラギ、サッパが多く、この3種で全体の7割以上を占めた。

買取り調査を開始した平成20年以降今年度までに東出雲水域で確認された魚介類は、魚類が14目40科の79種、軟体類が1目1科の2種、甲殻類が1目6科の13種で、合計16目47科94種であった（添付資料-表4）。東出雲の平成29年度の出現種の組成を尾数割合で見ると、ヒイラギの出現尾数の割合が最も高く、次いでマアジ、ウグイと続き、昨年度突出して高かったマアジはやや減少傾向にあった。（添付資料-表5）。